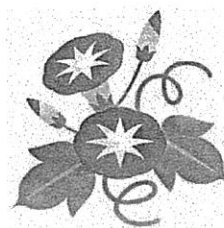


小島地区ふれあいセンターだより



令和7年7月 第421号 運営委員会発行

愛宕3丁目10-2 電話826-7703



7月の行事予定

※毎週月曜日は休所日です。

開催日	行事名
1日(火)	小島地区ふれあいセンター運営委員会 午前10時～11時
2日(水)	すこやか運動教室(生涯元気事業) 午前10時～12時
4日(金)	子育て教室 午前10時～11時30分
8日(火)	小島中学校区青少年育成協議会
12日(土)	小島愛宕地区老人連合会定例会議 午前10時～11時
16日(水)	すこやか運動教室(生涯元気事業) 午前10時～12時
25日(金)	小島地区連合自治会連絡会議
26日(土)	小島地区民生委員児童委員協議会定例会 午前10時30分～12時

小島地区ふれあいセンター(図書室・児童図書館)からのお知らせ

- ・図書室・児童図書館を利用できる時間は、9時から16時30分までです。
- ・長崎市立図書館と、ネットワークで繋がっています。
- ・所蔵本の貸出は、1人10冊まで、貸出期間(返却期限)は2週間です。
- ・他館で借りた本も返却が出来ます。

(但し、CD・DVDの貸出・返却は、長崎市立図書館のみです。)

- ・返却期限を過ぎたり、予約が入っている時は、継続貸出(貸出している本を同じ利用者が続けて借りること)が出来ません。
- ・返却期限から30日を過ぎると、貸出、予約、リクエストが出来ません。
- ・読みたい本の予約や、リクエストの受付・受取ができます。
- ・予約本やリクエスト本の取り置きは、ご本人に伝達後、1週間です。
- ・新規の図書貸出券(図書カード)の作成、更新、住所変更等が出来ます。
- ・寄贈本の受付ができます。(詳細については、事務室までお尋ねください。)
- ・「はじめまして絵本事業」の絵本を受け取れます。
- ・「新着図書コーナー」や、長崎の歴史や文化について学ぶことが出来る「郷土史コーナー」を設けています。

～読書、勉強、新聞の閲覧など、お気軽にご利用ください～



「小倉百人一首」を読み解く 竹方其

六番歌(中納言家持)
ちゅうなごんやかもち

かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

〔語訳〕

七夕の日、牽牛と織姫を逢わせるために、かささぎが翼を連ねて渡したという橋、天の川にちらばる霜のようにさえざえとした星の群れの白さを見ていると、夜もふけたのだなと感じてしまう。

〔留意点〕

・「かささぎの渡せる橋」：天の川のこと。中国の天の川伝説では、織姫と彦星を七夕の日に逢わせるため、たくさんのかささぎが翼を連ねて橋を作ったという。

・大伴家持は波乱に満ちた人生であった。従三位中納言(現在の国務大臣クラスの高官)になったが、藤原氏の勢力に押され、謀反に関わったとされ左遷や解任された。⁶³歳ころ東北地方(多賀城)で亡くなったようだ。亡くなった後も藤原種継の暗殺事件に関わったとして墓の遺骨も捨てられ、官位も奪われ、息子の永主も隠岐国へ流罪。死後20年以上経過して延暦25年(806)に恩赦を受けて、家持に従三位に復した。このように作者の名前が官職名で載るときは政治的な仔細があったことを知っておこう。

・従来の歌の解釈は右に記した内容のようになるのであるが、真の解釈とはいえない。

〔内容〕あたり一面、真つ白に霜がおりている。真冬なのに夜空には夏の星座が出ているよ。夜も更けきつてもう数刻で明け方なんだね。ほらあそこに織姫星と牽牛星が出ている。織姫と牽牛は年に一度真夏の七夕にカササギたちがつくる橋を渡って逢うというけれど、俺たちは国を守るカササギだ、人々を守るため、俺たちはこうして夜更けまで仕事をしているのだよ。

このような解釈をしてこそこの歌の真意が伝わる。

・当時、天智2年(663)朝鮮半島の百濟復興を目指す日本は唐・新羅連合軍に敗れる「白村江の戦い」が終わったばかりで唐・新羅連合軍の日本襲来に備えて国防の充実に明け暮れる日々であった。家持も国防の重責を担い、軍事に関するありとあらゆる計画に追われていた。軍隊の編成から移動、宿泊の手当や補強のための兵站、軍隊内部の調整、戦死者への追悼や給付、兵器などの装備強化などの各種手配など毎夜遅くまで仕事に邁進していた。

・この歌の作者を大伴家持とせず、中納言家持としたのは、ただ単なる公家としての家持ではなく政治家・軍人としての立場で詠まれた歌なのだ。このように官職名で紹介されてる歌は特に留意してみなければならない。



江戸町から立山役所まで④

○幕末モニュメント(つづき)

③上野撮影局跡(長崎市伊勢町)「タイムスリップ撮影」

④新町活版所跡(長崎市興善町)「近代活版と本木昌造」

○小曾根家宅跡(長崎地方法務局)

長崎を代表する豪商・小曾根家の屋敷がありました。

幕末の小曾根六左衛門と子の栄(乾堂)は文久2年(1862)小曾根町を造成し、半分を外国人居留地に編入しています。この屋敷には坂本龍馬や勝海舟が出入りし、亀山社中には多大な援助をしています。また、龍馬の妻、お龍さんも数ヶ月滞在し月琴を習得しています。

慶応2年(1866)近藤長次郎が単身イギリスへ渡航しようとしていた事が発覚し、梅の間で切腹しています。切腹した部屋の名より、皓台寺の彼の墓石には「梅花書屋氏墓」と刻まれています。これは坂本龍馬筆と云われています。

○大音寺坂(正覚山大音寺跡、坂の上天満宮跡)

ミゼリコルディアの破壊後、大音寺が建設され、寛永15年(1638)に現在地(鍛冶屋町)へ移転。享保18年(1733)に坂の上天満宮が創建されました。

跡地の石垣には「正面」の字が残され、この字をなぞると字が上手になるといわれています。

○長崎喧嘩騒動(深堀騒動、大音寺坂騒動)

元禄13年12月19日(1701/12)夕刻、大音寺坂において、佐賀藩深堀領の深堀三右衛門と柴原部右衛門は、当時財力と権勢を誇った唐蘭商売元締め・代物替会所頭取、高木彦右衛門の中間・惣内とすれ違ったおり、三右衛門が泥をはね、笠を汚したため惣内が絡んで来ました。三右衛門が誤り一旦は収まったが、その夜、高木家の者が深堀屋敷に仕返しに行き、武士の魂といわれる刀を奪い取り、屋敷を荒らして帰りました。

翌日、深堀の二人は19人の応援を受け、西浜町の高木彦右衛門屋敷に討ち入り、彦右衛門や屋敷にいた剣客を多数討ち果たしました。

このことは、町人でありながら権勢を誇っていた高木彦右衛門に対して、深堀の武士が面目を晴らす意味がありました。

一年後の赤穂浪士の討ち入りの参考にされたといわれます。

「小倉百人一首」を読み解く 竹方其

五番歌(猿丸太夫)
さるまるのたいふ

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

〔語訳〕

人里離れた奥山で絢爛たる紅葉がびつしりと敷きつめられたように散っている。その紅葉を踏みしめながら角の長い雄の鹿が現れ天を仰いで一声寂しく鳴いている。おそろく連れ合いの雌の鹿を求めて鳴いているのであろう。その声を聞いていると、いよいよ秋はなんと悲しい季節なのだろうと感じられる。

〔留意点〕

- ・古今和歌集ではこの歌は「読み人知らず」になっている。
- ・雄鹿が求愛の際に鳴く声は秋の風物詩。
- ・古今集の時代には、紅葉を踏み分けているのは鹿ではなく作者自身と解されていたが藤原定家ら後世になってからは、踏み分けてているのは鹿であると解されている。
- ・上句は牡鹿が、紅葉の絨毯を踏みしめて真っ赤に染まった舞台に登場、この世の贅を尽くしぬいた情景。下句は「声聞く時ぞ秋は悲しき」「悲しい」と詠んでいる。つまり高位高官の者たちが絢爛豪華な贅を求めることの愚かしさを詠っている。贅沢は所詮儚いもので、つまらないものだとなき論している。
- ・猿丸は実は元高位高官であるが、自分の名を隠すため猿丸などという滑稽な名にしたのであろう。



〈新着図書のご案内〉



	書 籍 名	著 者 名	出 版 社
一 般 図 書	禅的生活 365 日	玄侑 宗久	誠文堂新光社
	作家の黒歴史	宮内 悠介	講談社
	ノー・アニマルズ	鈴木 涼美	ホーム社
	一番手柄	岡本 さとる	祥伝社
	ごんげん長屋つれづれ帖	金子 成人	双葉社
	貸し物屋お庸謎解き帖 [4]	平谷 美樹	大和書房
	狐祝言	芝村 涼也	双葉社
	椿平九郎留守居秘録 5	早見 俊	二見書房
	廓証文	芝村 涼也	双葉社
	ぬくもり	宮部 みゆき	PHP 研究所
	問答無用	稲葉 稔	徳間書店
	平蔵の首	逢坂 剛	文藝春秋
	冬の縁談	芝村 涼也	双葉社
	ぼくはあと何回、満月を見るだろう	坂本 龍一	新潮社
	椿平九郎留守居秘録 6	早見 俊	二見書房
	食でたのしむ NHK 大阪制作の連続テレビ小説	—	ぴあ
	G線上のアリア	湊 かなえ	朝日新聞出版
	落雷と祝福	岡本 真帆	朝日新聞出版
	ドライブ九州ベスト	—	昭文社
	定年後の仕事図鑑	坂本 貴志	ダイヤモンド社
児 童 図 書	ケロリン百年物語	笹山 敬輔	文藝春秋
	茶漬け一膳	岡本 さとる	祥伝社
	カフネ	阿部 暁子	講談社
	春風同心十手日記 2	佐々木 裕一	小学館
	桃太郎姫望郷はるか	井川 香四郎	実業之日本社
	純喫茶クライ	吉田 桃子	岩崎書店
	しずかなよる	ジル・マーフィ	ひさかたチャイルド
	妖鳥魔獣物語	廣嶋 玲子	小峰書店
	ホテルの光をつなぐもの	福岡 伸一	福音館書店
	グリーンインフラって何だろう？	福岡 孝則	PHP 研究所